二十三年度全国人権作文コンテスト県大会で、下諏訪町の中学校から、県最優秀賞一点と奨励賞二点と、三名の生徒が入賞を果たしました。前号に引き続き、作品を紹介いたします。

共に生きる

下諏訪社中学校　二年　中村　満帆

私は、祖母と父母、そして愛犬と一緒に暮らしています。私の祖母は、耳が悪くて補聴器を使っています。祖母によると、ある日朝起きたら耳鳴りがして、片方の耳が聞きづらくなったとのことです。近くの病院で看てもらってもよくならず、東京にいい病院があると聞いて看てもらったりもしましたが、耳鳴りはおさまらず、「これ以上は無理だから、上手につきあっていくように」と言われたそうです。その時は本当にショックだったと話してくれました。それから何十年か過ぎて、孫の私が生まれて三歳くらいのとき、今度はよかった耳までも耳鳴りに襲われました。やっぱり治療はしても、よくならず、そのうち歌が耳の奥でずっと鳴っている感じがしたそうです。祖母は、両方の耳が聞こえにくくなったことは、とてもショックだったし、補聴器を使わなくてはならなくなったこともショックだったと話してくれました。

私は今まで大きな病気をすることなく、元気に生活してこれました。だから、その辛さがどのくらいなのか、想像することしかできません。小さい時には、祖母によく遊んでもらいましたが、それを感じたことは、あまりありませんでした。でも冬のある日、道路で雪かきをしていた祖母の近くを車が通り過ぎるのを見て、「危ない！」と思ったことがありました。祖母は車が来ていることを音で判断することができなかったのです。

車を運転している人は、耳が聞こえにくいのだとは思わないだろうし、無理もないのかもしれません。でも、全てにおいて健康な人ばかりではないということを、その時私は知ってほしいと思いました。

日本では、人口の四分の一が高齢者という時代も、遠からずくるらしいです。また、高齢者の一人暮らしが多くなっているそうです。昔より、核家族化・少子化が進んでいるというのを本で見たことがあります。「おじいさん・おばあさん」と一緒に住むことがなくなり、高齢者とふれあう機会が少なくなってきているそうです。高齢者になると、それぞれ個人差はあっても、年齢を重ねると体力や記憶力が落ちていくとありました。素早い動作ができなくなったり、目や耳が不自由になることもあり、寝たきりで介護が必要になる人もいるとありました。まわりの人の理解が足りないため、邪魔者扱いされて、辛い思いをすることもあると聞くと、私は悲しくなります。祖母の知り合いには、食事も別々で、話すこともあまりない家族があると聞きました。育ってきた環境が、今と昔では大きく違うこともあり、お互いに理解するのが難しいと思うこともたくさんあると思います。でも、それを理解して、協調することが大切だと思います。

今は考えられないけど、いつかは私も、おばあちゃんになってしまいます。その時、若い人に差別的な扱いをされたらどう思うでしょうか。

私の祖母は、とてもアイデアにあふれています。「おばあちゃんの知恵袋」みたいに、いろいろなことを教えてくれます。物がたくさんなかった時代、かんたんに手に入らなかった時代を生きてきた祖母達は、いろいろ自分で考えて、工夫してきたのです。本当にすごいと思います。楽しいおもちゃはたくさんありますが、そうではない工夫でいっぱいの、小さな私が興味をもつような楽しい遊びを考えてくれました。押し入れを改造して、秘密基地を作ってくれたり、家の中にブランコを作ってくれたりしたのもその一つです。今でもそうですが、こうしたらもっといいかもとか、私が考えつかないたくさんのアイデアを持っていて、いつもアドバイスしてくれる心強い味方です。

お年寄りの人たちは年齢を重ねた分、いろいろな経験をされ、豊富な知識をもっていると思います。その経験や知識を生かせれば、生きがいをもって暮らせると思います。

調べてみると、「シルバー人材センター」というのがありました。「自主・自立・共働・共助を基本理念に、高齢者が地域を単位に連帯して、共に助け合うことを目指す団体」とありました。高齢者の生きがい作りを目的とし、仕事を通して積極的に社会に参加、家庭や家族に活力を生み出すこととも書いてありました。仕事の内容は家事一般から専門技能が必要なもの、いろいろあるそうです。地域社会に参加し、年齢の違う人とかかわりをもつことは、高齢者の人にも大切ですが、私達にとっても、いろいろなことを学べるいいチャンスだと思います。

子どもからお年寄りまで、みんな様々な意見をもっています。それぞれが違って当たり前と理解し、それぞれが助け合っていける社会、優しい社会を目指していきたいと思います。

（現在は三年生）

教育委員会からのおしらせ

町民大学　―下諏訪を学ぶ①―

演　題：生誕百年 劇作家阿木翁助の生涯
講　師：市川　一雄（下諏訪町文化財専門委員）
日　時：６月10日（日）午後１時30分～午後３時
会　場：下諏訪総合文化センター２階集会室

市川先生

阿木翁助、本名安達鉄翁。町内矢木崎で育った。苦学して築地小劇場演劇研究所に学び、22歳で作家デビュー。「ムーランルージュ新宿座」などで脚本を書きまくり＜演劇の青春＞を駆け抜けた。戦後はラジオドラマ作者を経て、テレビドラマ草創期のシナリオライターとして活躍し、日本テレビ常務（製作本部長）日本放送作家協会会長をつとめ、平成14年没。享年90。（講師コメント）

六月のこえ

庭の紫陽花が一雨ごとにその色合いを深めている。

人生において、真の自立を促される機会は、時を選ばないのだという体験を、今春私たち一家は味わった。

私たち一家の人生の重要な場面に、いつも寄り添い、心身ともに的確な助言をいただいていた先生が亡くなられた。生き方の支えを失った思いであった。先生亡き後の自分たちの健康への不安を思うと、今までいかに頼り切っていたか痛感し、早過ぎる死を思い、毎日涙に暮れていた。

しかし、そろそろ自立しなさい、独り立ちしなさいと言われたのだと理解し、先生への感謝の念を胸に、これまで以上に心身の管理に心がけしっかり前進しようと、それぞれに決心した。

人生には辛いことが待ち受けているが、どのような時にもしっかり顔を上げて、自分の生を全うするまで前を向いて進もうと、雨に濡れる紫陽花を見て、改めて思い返している。（上脇）